



下村チーフアドバイザー、1年6ヶ月間を振り返って

2014年2月末日の任期満了により帰任された下村専門家にプロジェクト開始からの1年6ヶ月間を振り返ってもらいました。

Q1. プロジェクトへの思い

2012年8月24日プロジェクト開始(=ラオス赴任)から2014年2月28日まで約1年6ヶ月間、長期休暇も取らずにプロジェクト運営に専念されてきました。この1年6ヶ月間の思いをお聞かせください。



赴任当初は、やはり生活の立ち上げやプロジェクトの立ち上げに追われ、とてもストレスの高い毎日だったかなと思います。

それでも、そんな立ち上げ期でも、日本からのお客様を迎え入れたり、バンコクで開かれた無収水管理の世界会議に参加したり、初年度の本邦研修生に同行したりとプロジェクトの実活動にも追われながらも、1歩1歩、着実に活動を進めることができたかなと、今は思っています。

いわば、きちんと種まきができたので、2012年度の最初の短期専門家の方たちとの活動も、最初から、スムーズに開始することができたと自負しています。

そして、MaWaSU活動が本格化したのは、年が明けた2013年から。まずはデータ管理に関する活動。そして4月以降は、計画給水区域の設定に始まり、長期計画の策定活動に着手。国の行政的にも業務指標 (Performance Indicators) を使ったモニタリング活動を具体化し実施に移すことができました。

プロジェクト関係者のほとんどは、親元(さいたま市水道局)での過去20年にわたるラオスとの関係から人間関係がすでにできていましたが、MaWaSU活動の真の理解を含めた1歩進んだ信頼関係は半年目くらいから醸成され1年が経過したところに、しっかりとしたものとなってきたと思います。

そして自分自身の活動目標は、35年以上にわたる第1の自分の水道人生で培ったノウハウ、技術そして水道に対する思いを、短期専門家のみなさんも含めて、MaWaSU関係者の全ての方々に伝えることと、明確に自覚し、その思いで活動をし始めたのが、この時期だったと思います。

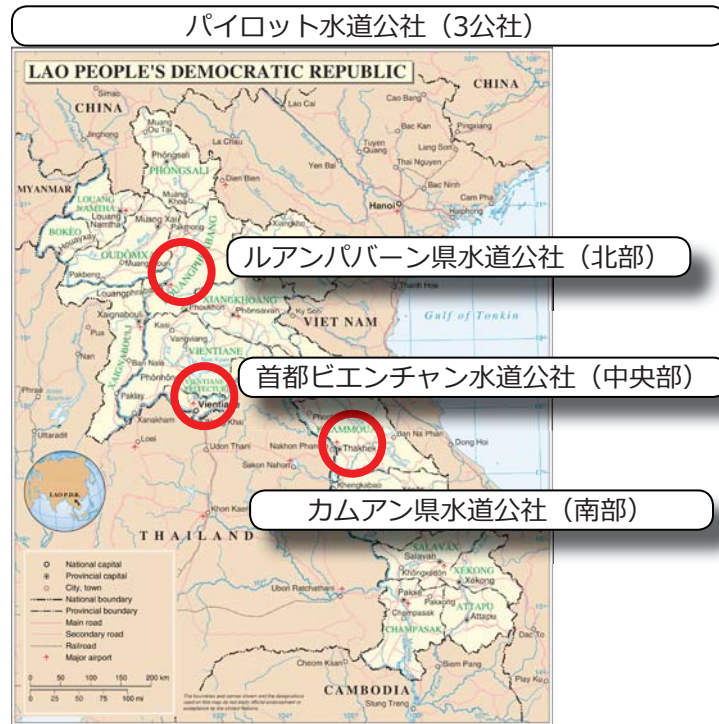
そして第3半期である、今回の自分のフェーズの終盤は、公私ともに充実した活動をする事ができ、PDCAサイクルの1巡目がゴロっと回ったと実感することができ、大きな達成感をもってMaWaSUから離任をすることができました。

この1年は、自分の仕事上の女房である木下専門家やシャトル便で来ていただく短期専門家のみなさんとこの1年半、良好な関係で支えあい励ましあいながら活動できたことも、今のところ順調にMaWaSU活動が進められたことの大きな要因です。

ラオス水道公社事業管理能力向上プロジェクト

ラオス国では1999年に出された首相令により、2020年までに都市人口の8割に対して24時間の安全で安定的な都市給水を行うことを目標としています。JICAをはじめ各ドナー機関はこれまでに様々な支援を行っていますが、2010年の都市における水道普及率は55%にとどまっています。国が掲げる目標値を達成するためには、水道施設のさらなる拡張・更新、そのための事業運営の効率化を通じた投資資金の確保が必要です。事業運営効率化に向けては、これまでに短期的な計画策定とモニタリングの枠組みが設定されています。しかし、自力では短期計画の策定や更新ができない水道公社が多く実効性に乏しい枠組みとなっています。また、水道施設拡張・更新に必要な、中長期的な水需要予測や財政収支見通しに基づく事業計画の策定とモニタリングは管轄省庁である公共事業運輸省による制度化すらされておらず、現にほとんどの水道公社は中長期事業計画を有していません。

そのため、本プロジェクトでは、公共事業運輸省を主なカウンターパートとし、首都ビエンチャン、ルアンパバーン県、カムアン県の水道公社をパイロット水道公社に選定し、①事業計画策定に必要なデータ管理強化、②短期・中期・長期事業計画策定/実施能力強化、③事業計画モニタリング強化、④水道事業計画技術ガイドライン整備、⑤事業計画策定の全国普及へのメカニズム構築を行い、事業管理能力強化の仕組み整備を行っています。



Q2. プロジェクト成果

1年6ヶ月の間にいくつかの成果が出てきています。チーフアドバイザーからの視点で達成されている成果をプロジェクト開始時と比較して挙げてください。



PDMに書かれていることは、若干の遅れを伴いながらも、着実に成果が出ています。

期待アウトプット1では、水道事業を展開するために必要なデータリストの作成、データ管理改善計画の策定と実施、これらの活動をもとにしたデータ管理マニュアル案そして2012年版水道事業サマリー年報と2013年版の編集方針。

アウトプット2では、各水道公社の長期構想と2020年を目標にした長期計画。

アウトプット3では、すでに決まっていたにもかかわらず実施に移されていなかった9つの業務指標 (Performance Indicators) を具体化し、3パイロット水道公社のみならず、他、全国14の水道公社を含めて全国展開できたこと。

そして、これらをもとに、水道事業ガイドラインの草案の作成とこれらを成案にするために国と県の行政と水道公社が一体となって進めるという道筋を明確にしたことなど。

しかしながらこれらの具体的成果物を、的確に出すことができたのは、PDMに書いていない活動に、長短専門家団、フルタイムカウンターパートそして現地採用スタッフが一丸となって力を注いだことが大きかったと評価しています。

すなわち我々の、水道やMaWaSU活動に対する思いを明確にわかりやすく相手に伝え、ぶれることなく夢に向かって進むことを態度で示すことにより、プロジェクト関係者それぞれの方が、それぞれに強い信頼関係で結ばれることができたこと。

特に、水道公社の局長も含め職員自身が、MaWaSU開始時には、水道の水は飲めないと公言していましたが、今では、飲めるあるいは飲めるようにすると明確に自覚をしてくれたことが、全てのMaWaSU活動の根底を流れる重要な考え方として機能し、スタッフ全員が何のために何をすべきかを真に理解することができたこと。これが、今後のプロ目達成に向けて一番重要な成果であると思っています。



Q3. プロジェクトの課題

プロジェクト期間5年間のうち、1年6ヶ月が経ちました。これまで散見された課題と今後プロジェクト終了まで3年6ヶ月間の課題をお伝えください。

プロジェクト立ち上げから1年くらいまでの課題は何といっても、自分たちがやるのではなく、JICAが、専門家が何かしてくれるとのカウンターパートたちの考え方だと思います。

同時に、MaWaSUは、水道職員が、本来日常的に取り組まなければならない活動をプロジェクトとして実施しているもので、ある一定期間に一定の成果を出して終わるとい活動ではないとの認識が欠如していたことがあげられます。

これらはいずれも、20年以上に渡ってドナー漬けとなってきた負の遺産でしょうか。

でも、現在は、前述の通り、意識改革が進み、この課題は、もはや過去のものになりつつあるかなと思いますが、ただし、MaWaSUの関係者だけの話であり、これらを相手側組織全体に、あるいは、ラオス全国に普及させていくことは、今後とも大きな課題であると思っています。

さらに、人材不足の問題です。

量、質ともに不足しており、優秀なカウンターパートはいくつものプロジェクトを担当しており、MaWaSUに集中できないという現状です。

これらに加えて、同種の活動をしているドナー間で調整を行い、より効率的に、ラオス水道セクターの底上げを実施していくことが、これからの課題だと認識しています。



WASROとの毎週の勉強会の様子



Public relationsワークショップの様子



プロジェクトKick-off会議(カムアン県)の様子

Q4. 関係機関とのつながり

下村さんは2014年3月末でさいたま市水道局を定年退職されます。本プロジェクトは、JICA事業であるとともに、さいたま市水道局が長年ラオスの水道公社を支援してきていることの一環でもあります。今後、さいたま市水道局とラオスの水道公社とのつながりがどのような形になることを望まれておられるでしょうか？また、本プロジェクトには埼玉県企業局、川崎市上下水道局、横浜市水道局からも専門家を派遣いただいています。各水道事業体とさいたま市水道局、ラオスの水道公社とのつながりについてもお聞かせください。



さいたまプロジェクトとの一面を持つMaWaSUですから、自分としても、早く自分の後継者を作りバトンタッチをすることが次の質問(Q5)とも関連しますが、自分の現在の大きな責務の一つと認識しています。

そうしたことにより、今後とも、さいたま水道とラオス国水道セクターとのパートナーシップが今後も末永く続くこと望まれます。

そして、厚生労働省、日本水道協会、水道技術研究センターと各近隣やこうした活動に意欲を燃やす水道事業体と一緒にラオス水道セクターの底上げを行っていくことは、ラオスと日本の双方にとってWin-Winであると思います。

こうしたネットワークによって、それぞれの組織で、着実に人材が育つことは、過去の経験から言っても明白だからです。

Q5. 再赴任後の抱負

ご退職後、2014年度にチーフアドバイザーとして再赴任される予定です。再赴任後の抱負をお聞かせください。

2014年度の活動の主軸は、アウトプット2に向けた活動で、各水道公社で策定された計画の着実な実施です。

実施するためには、計画策定以上に、ノウハウ、技術そしてツールが必要となります。

合わせて、各種規定・規格、基準やガイドライン、マニュアルの類が求められます。

したがって、アウトプット1で、必要データ管理の改善を進め、アウトプット2では、ツール等の導入を図りつつ各専門家による技術・ノウハウの移転を進め、アウトプット3あるいはアウトプット4でこれら基準等の設定を急がなければなりません。

そしてこの膨大な作業をカウンターパートのみならず進めていくためには、水道協会のような第3者機関による、規格やガイドライン等の設定と、企画等に適合しているかどうかの検査や実施の評価を行うこと、そして、工事等の設備整備を着実に実施する受け皿として公認業者制度などのPPPの活用が重要なカギを握ると考えています。

これらに向けた取り組みをカウンターパートが確実に実施していけるよう、着実な支援をしていくことが、専門家団の今年の主活動であり、先ずは、着実に実施していくために、具体活動を整理していきたいと思っています。



課外活動(カムアン県)の一コマ



課外活動(ルアンパバーン県)の一コマ



60歳の誕生日にProject MAWASU特製Tシャツとともに祝福される下村専門家



C/Pスタッフを引率してタイ・バンコクへの海外出張



帰任直前のパシー・セレモニー

*** 皆様のご意見・ご感想をお待ちしております ***

ラオス水道公社事業管理能力向上プロジェクト事務所

Eメール/電話 : jicapimawasa@gmail.com / (+856-21) 260493

プロジェクトホームページ : <http://www.jica.go.jp/project/laos/012/index.html>